

## 生徒の学習到達度調査(PISA)結果

### ***(Knowledge and Skills for Life: First Results from PISA 2000)***

15歳を対象とするOECDの新たな調査によれば、読解力ではフィンランドが、数学的リテラシーと科学的リテラシーでは日本と韓国が、それぞれトップとなりました。この調査には32ヶ国から26万5,000人の15歳が参加しましたが、この3ヶ国は成績最上位者と成績最下位者の差が最も小さかった国のグループにも入っていました。

OECDの「生徒の学習到達度調査(PISA)」は、義務教育を修了する生徒が実社会で生活していくのに必要とされる知識と技能をどの程度身につけているかを調査するものです。今回公表されたデータは昨年行われた第1回調査に基づいています。PISAは今後、3年ごとに実施され、生徒の知識と技能に関する最も包括的な国際調査になると期待されています。

PISAは、生徒の学習到達度ばかりでなく、生徒の学習への姿勢や取り組み方についても調査します。調査を行うことによって、家庭や学校でリテラシーの発達に影響を及ぼす要素ならびにそれらの要因の相互作用を洞察する際の手掛かりとなる一連の国際比較可能な指標が得られます。これらの指標は、政策当局が将来、政策を選択する際に基盤となるユニークな基準となります。

今回の調査の結果で主なものは次の通り。

- 平均で、先進国の15歳の10%が、複雑な文章を理解し、情報を評価し、仮説をたて、専門的知識を利用できるという、最高レベルの読解力を身につけている。オーストラリア、カナダ、フィンランド、ニュージーランド、英国では、この比率は15~19%だった(図参照)。
- 読解力が低かった国では、平均で15歳の6%——国によってはその2倍以上——が習熟度の最低レベルであるレベル1にも達しなかった。さらに12%が、単純な情報を探し出したり、文章の主要なテーマを把握するといった非常に基本的な読解力の習得を要求するレベル1にやっと達している状態であった。これらのカテゴリーの児童は、学習を続けていくのに必要とされるリテラシー技能の基礎が著しく欠けており、進学後や卒業後にさらに教育を受ける機会があってもそうした機会を十分に活かさないことを示している。
- 数学的および科学的リテラシー——学校で習得した数学や科学の知識を技術や科学の進歩への依存度を強めている世界で生かしていく生徒の能力——でトップに立ったのは日本と韓国であった。

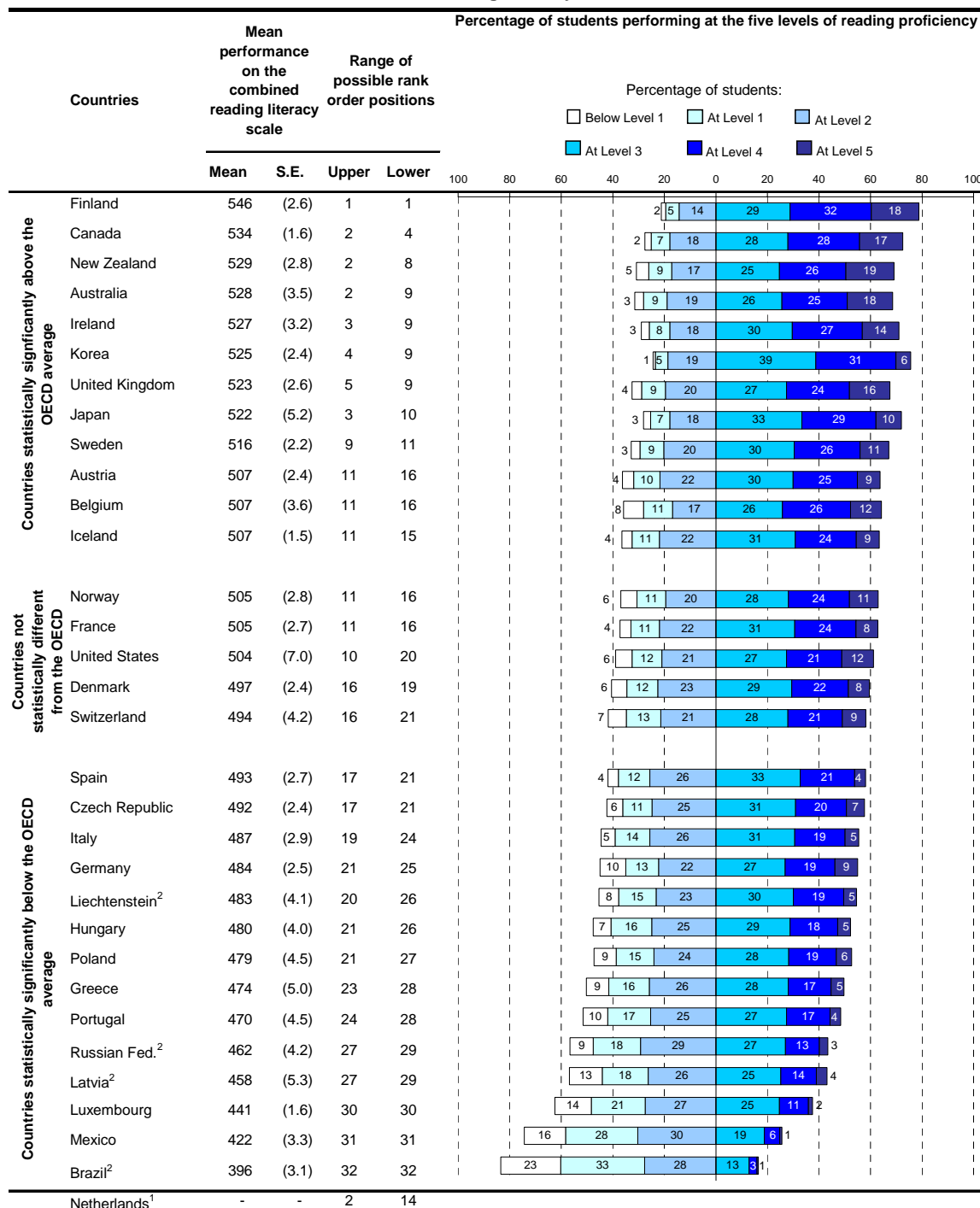
- 全体的にパフォーマンスが良い国は、生徒間のパフォーマンス格差が小さい傾向がある。3分野のパフォーマンスの平均を見ると、一部の国——特にフィンランド、日本、韓国——は平均して高いレベルに達している一方で、最上位者と最下位者との差は比較的小さい。最上位者と最下位者との差が最も大きい国の1つであるドイツでは、パフォーマンスの平均はOECD平均以下であった。ここでのパフォーマンスの差は主に学校間の差によるものである。全体的に見ると、生徒や学校間の格差は、早い段階で学習科目と学校のタイプを分けている国の方が大きくなる傾向がある。
- 多くの国では、男子は読解力で大きく劣る。調査を行ったすべての国で、男子より女子の方が平均して読解力は優れていた。国によって大きな差が見られたが、これは、男子と女子に同様の恩恵を与える学習環境等の提供における国の力量の違いを反映している。全ての調査参加国で、読解力がレベル1以下になる可能性は女子よりも男子の方が大きい。読解力のパフォーマンスでトップに立つフィンランドではその差は3倍以上にも達する。
- 調査を行った国の約半数で、女子より男子の方が数学的リテラシーは優れていた。しかし、この差は主に、パフォーマンス優秀者の中に男子の方が多く、低いパフォーマンスの生徒については男女同数であったということによるものである。科学的リテラシーでは、差はより小さく、国による格差もほとんど見られなかった。
- 学校との全般的な関係では生徒間に大きな差がある。読書に対する姿勢にも大きな差が見られ、数学への意欲についてはその差はさらに大きい。28ヶ国中20ヶ国では、生徒の4人に1人以上が学校を行きたくない場所と考えており、ベルギー、カナダ、フランス、ハンガリー、イタリア、米国では、この比率は35～42%となっている。15歳の約半数は、数学は一般的に重要と考えているが、それが自分の将来にとって重要と考える生徒は極めて少ない。
- 生徒1人当たりの平均的支出額が大きい国は3分野のパフォーマンスの平均が高い国でもあるという傾向が見られるが、それが保証されるわけではない。
- 恵まれた社会的環境にいる生徒ほどパフォーマンスが良いという傾向があるが、一部の国ではその差は他の諸国よりも小さい。カナダ、フィンランド、アイスランド、日本、韓国、スウェーデンは、読解力は平均以上であった、社会的環境がパフォーマンスに及ぼす影響については平均以下である。チェコ共和国、ドイツ、ハンガリー、ルクセンブルグはその逆であった。
- 調査結果は学校によって大きく異なる。しかし、大部分の学校が高い水準に達している国もある。学校間の格差が大きい国では、これらの格差は学校の社会経済的要素によるという傾向がある。
- 一部の学校が何故良い結果を出せたかを説明する要因はないが、一部の学校の方針や慣習の中に成功につながるものがあると言える。例えば、生徒が学校の資源をどの程度使用するか、専門知識を持つ教師がどのくらいいるか、意思決定において学校がど

の程度関与するかはすべてプラスに作用する。また、教師が高い期待感と士気を持ち、教室内の人間関係と規律が良好に保たれていると、良いパフォーマンスにつながる傾向がある。

(PISA の詳細については <http://www.pisa.oecd.org> を参照のこと。)

### Reading Literacy

Percentage of students performing at the five levels of reading proficiency



1. Response rate is too low to ensure comparability (see Annex A3).

2. Non-OECD country

| Mathematical Literacy  |  |         |  |       | Scientific Literacy |  |   |  |         |       |       |    |
|--|--|---------|--|-------|---------------------|--|---|--|---------|-------|-------|----|
| Countries  | Mean performance on the mathematical literacy scale          |         | Range of possible rank order positions |       | Countries           | Mean performance on the scientific literacy scale            |   | Range of possible rank order positions |         |       |       |    |
|  | Mean   | S.E.    | Upper                                  | Lower |                     | Mean   | S.E.  | Upper                                  | Lower   |       |       |    |
| Countries statistically significantly above the OECD average | Japan  | 557     | (5.5)                                  | 1     | 3                   | Countries statistically significantly above the OECD average | Korea   | 552                                    | (2.7)   | 1     | 2     |    |
|  | Korea  | 547     | (2.8)                                  | 2     | 3                   |  | Japan   | 550                                    | (5.5)   | 1     | 2     |    |
|  | New Zealand  | 537     | (3.1)                                  | 4     | 8                   |  | Finland   | 538                                    | (2.5)   | 3     | 4     |    |
|  | Finland  | 536     | (2.1)                                  | 4     | 7                   |  | United Kingdom  | 532                                    | (2.7)   | 3     | 7     |    |
|  | Australia  | 533     | (3.5)                                  | 4     | 9                   |  | Canada  | 529                                    | (1.6)   | 4     | 8     |    |
|  | Canada   | 533     | (1.4)                                  | 5     | 8                   |  | New Zealand   | 528                                    | (2.4)   | 4     | 8     |    |
|  | Switzerland  | 529     | (4.4)                                  | 4     | 10                  |  | Australia   | 528                                    | (3.5)   | 4     | 8     |    |
|  | United Kingdom   | 529     | (2.5)                                  | 6     | 10                  |  | Austria   | 519                                    | (2.5)   | 8     | 10    |    |
|  | Belgium  | 520     | (3.9)                                  | 9     | 15                  |  | Ireland   | 513                                    | (3.2)   | 9     | 12    |    |
|  | France   | 517     | (2.7)                                  | 10    | 15                  |  | Sweden  | 512                                    | (2.5)   | 9     | 13    |    |
|  | Austria  | 515     | (2.5)                                  | 10    | 16                  |  | Czech Republic  | 511                                    | (2.4)   | 10    | 13    |    |
|  | Denmark  | 514     | (2.4)                                  | 10    | 16                  |  | Countries not statistically different from the OECD average | France                                 | 500     | (3.2) | 13    | 18 |
|  | Iceland  | 514     | (2.3)                                  | 11    | 16                  |  |   | Norway                                 | 500     | (2.7) | 13    | 18 |
| Liechtenstein <sup>2</sup>                                   | 514  | (7.0)   | 9                                      | 18    | United States       | 499  |   | (7.3)                                  | 11      | 21    |       |    |
| Sweden   | 510  | (2.5)   | 13                                     | 17    | Hungary             | 496  |   | (4.2)                                  | 13      | 21    |       |    |
| Countries not statistically different from                   | Ireland  | 503     | (2.7)                                  | 16    | 19                  | Iceland  |   | 496                                    | (2.2)   | 14    | 20    |    |
|  | Norway   | 499     | (2.8)                                  | 17    | 20                  | Belgium  |   | 496                                    | (4.3)   | 13    | 21    |    |
|  | Czech Republic   | 498     | (2.8)                                  | 17    | 20                  | Switzerland  |   | 496                                    | (4.4)   | 13    | 21    |    |
|  | United States  | 493     | (7.6)                                  | 16    | 23                  | Countries statistically significantly below the OECD average |   | Spain                                  | 491     | (3.0) | 16    | 22 |
|  | Countries statistically significantly below the OECD average | Germany | 490                                    | (2.5) | 20                  |  |   | 22                                     | Germany | 487   | (2.4) | 19 |
| Hungary  |  | 488     | (4.0)                                  | 20    | 23                  |  |   | Poland                                 | 483     | (5.1) | 19    | 25 |
| Russian Fed. <sup>2</sup>                                    |  | 478     | (5.5)                                  | 21    | 25                  |  |   | Denmark                                | 481     | (2.8) | 21    | 25 |
| Spain  |  | 476     | (3.1)                                  | 23    | 25                  |  |   | Italy                                  | 478     | (3.1) | 22    | 25 |
| Poland   |  | 470     | (5.5)                                  | 23    | 26                  |  |   | Liechtenstein <sup>2</sup>             | 476     | (7.1) | 20    | 26 |
| Latvia <sup>2</sup>  |  | 463     | (4.5)                                  | 25    | 28                  |  | Greece  | 461                                    | (4.9)   | 25    | 29    |    |
| Italy  |  | 457     | (2.9)                                  | 26    | 28                  |  | Russian Fed. <sup>2</sup>                                   | 460                                    | (4.7)   | 26    | 29    |    |
| Portugal   |  | 454     | (4.1)                                  | 26    | 29                  |  | Latvia <sup>2</sup>   | 460                                    | (5.6)   | 25    | 29    |    |
| Greece   |  | 447     | (5.6)                                  | 27    | 30                  |  | Portugal  | 459                                    | (4.0)   | 26    | 29    |    |
| Luxembourg   |  | 446     | (2.0)                                  | 29    | 30                  |  | Luxembourg  | 443                                    | (2.3)   | 30    | 30    |    |
| Mexico   |  | 387     | (3.4)                                  | 31    | 31                  |  | Mexico  | 422                                    | (3.2)   | 31    | 31    |    |
| Brazil <sup>2</sup>  |  | 334     | (3.7)                                  | 32    | 32                  |  | Brazil <sup>2</sup>   | 375                                    | (3.3)   | 32    | 32    |    |
| Netherlands <sup>1</sup>                                     |  | -       | -                                      | 1     | 4                   |  | -   | -                                      | 3       | 14    |       |    |

1. Response rate is too low to ensure comparability (see Annex A3).

2. Non-OECD country

生徒の学習到達度調査（PISA）で特に日本に関係する部分の要旨は次の通り。

### はじめに

1. 今日の学校修了者はどの程度知識社会の挑戦に応える準備ができているのか。複雑な文章を正確に読み、その意味を理解できるのか。技術や科学の進歩への依存が強まる世界で成功するために、学校で習得した数学や科学の知識を利用できるのか。
2. OECD「生徒の学習到達度調査（PISA）」の第1回調査結果は、こうした疑問にいくつかの答えを提示している。PISAはOECD加盟30ヶ国の新たな主要活動で、義務教育を修了する生徒が実社会で生活していく上で基本的に欠かせない知識と技能をどの程度習得しているかを調査するものである。PISAの第1回調査は2000年に32ヶ国の約26万5,000人の生徒が参加して行われた。3年ごとに行われるこの調査は、生徒の知識と技能に関する最も包括的な国際調査である。
3. PISAでは読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーのほか、学習に対する生徒の姿勢や取り組み方を調査する。PISAはまた、家庭や学校でリテラシーの発達に影響を及ぼす要素を分析し、そうした要因の相互作用を検証し、政策立案への影響を考察する。PISAは生徒の学習到達度に関する国際比較可能な情報を提供することによって、政策を選択する際に基盤となるユニークな基準となる。

### 日本はパフォーマンス上位国の1つ

4. 日本はパフォーマンス上位国の一つである。日本と韓国は数学的リテラシーと科学的リテラシーで1位と2位を占めた（図3.5参照）。この結果は先般行われた国際的な数学・理科調査——国際教育到達度評価学会（IEA）の国際数学・理科教育調査（TIMSS）など——と同様であるが、日本、韓国と他のOECD諸国の差はTIMSSよりPISAの方が小さくなっている。
5. 読解力では、日本は8位にランクされている。しかし、いくつかの国が僅差で並んでいることや統計的不確実性などから、日本は3位から10位の範囲内と考えられる（図2.4参照）。
6. 3分野のすべてで、日本はパフォーマンス最上位者と最下位者との差が比較的小さい（表2.3参照）。したがって、日本は、フィンランド、韓国とともに、生徒の学習到達度が均一化することで全体的なパフォーマンスの良さが失われることはないということを示している。対照的に、最上位者と最下位者との差が最も大きい国の1つであるドイツでは、パフォーマンスの平均はOECD平均以下であった。ここでのパフォーマンスの差は主に学校間の差によるものである。
7. パフォーマンス平均が高水準にあり、生徒間の差が小さい日本では、PISAの読解力調査で最低レベルだった学生は全体の10%（OECD平均は18%）に過ぎなかった（表2.1a参照）。読解力の最低レベルとは、単純な情報を探し出したり、文章の主要なテー

マを把握するといった非常に基本的な読解作業のみが出来るというレベルである。学習を進めていくのに必要とされるリテラシー技能の基礎が著しく欠けている生徒はごく小数ながら存在している。こうした生徒は教育を受ける機会があってもその恩恵を十分に受けることができず、進学後や卒業後にそうした恩恵を受けるのに必要とされる知識と技能を修得できない可能性が強い。

8. 他方、パフォーマンスの国内格差が小さいということは、パフォーマンス平均が高水準であっても、日本には優れた読解力を持つ生徒が他よりも際立って多いわけではない——複雑な文章を理解し、情報を評価し、仮説をたて、専門的な知識を利用できるという読解力の最高レベルに達している生徒は 10%しかいない——ということを意味している (表 2.1a 参照)。オーストラリア、ニュージーランド、英国では、平均的なパフォーマンスは日本とほぼ同じ水準だが、最高レベルの生徒が全体に占める割合は日本よりも大きい (15%から 19%)。それは、主として、最上位者と最下位者との差が大きいことによるものである。他方、数学的リテラシーと科学的リテラシーでは、パフォーマンス上位 10%の生徒の得点は他のどの国よりも日本の方が高く、上位 25%についても同様であった。

## 男女の差

9. すべての国で、男子より女子の方が平均して読解力は優れており、多くの国でこの差は統計的にも実質的にも大きい。一方、約半数の国で数学的リテラシーは男子の方が優れているが、科学的リテラシーでの男女格差は数学的リテラシーより小さく、国によるの差もほとんど見られない。しかし、男女間の差は国によってまちまちであった。一部の国は男子と女子に同様の恩恵を与える学習環境等を提供している。日本の場合、読解力では女子の方が男子より 30 点高かった (OECD 平均は 32 点) (表 5.1a 参照)。数学的リテラシーと科学的リテラシーでは、日本の男女間の差は小さく、統計的に有意ではなかった。
10. 読解力の男女格差がパフォーマンス最下位グループの生徒でより大きいことは、重要な政策問題につながる。すべての調査対象国で、読解力がレベル 1 以下になる可能性は女子より男子の方が高い。日本も例外ではなく、男子の 15%が読解力レベル 1 以下であるが、女子ではわずか 6%である。(表 5.2a 参照)。
11. こうした状況において、読書に費やす時間は大半の国で女子より男子の方が短いという傾向が見られたことは特筆に値する。OECD 諸国平均で、女子の 45%が毎日 30 分以上読書している (日本の 27%からチェコ共和国、フィンランド、ポーランド、ポルトガルのその倍以上まで幅がある)。男子の場合の OECD 平均は 30%で、オーストラリア、オランダ、スイスの 20%以下からギリシャ、韓国、ポーランドの 40%以上まで幅がある (図 5.5、表 5.3)。日本はこうした一般的パターンの例外で、男女とも同じように非常に多くの生徒 (55%) が読書をしないと回答している (表 5.3)。これは、1 つ

には、日本では放課後に塾や部活動などがある生徒の比率が高いので単純に趣味で読書する時間が無いせいかもしれない。しかし、こうした生徒のパフォーマンスは、OECD 平均を上回ってはいても、読書の習慣のある生徒より著しく劣っているだけに、この点はやはり特筆に値する（表 4.4）。

### 教育への投資と国別パフォーマンス

12. OECD 諸国全体で、生徒 1 人当たりの平均支出額が大きい国は 3 分野のパフォーマンス平均は高いという傾向が見られるが、この関係は直線的なものではない。例えば、日本のパフォーマンスは国民所得（1 人当たり GDP）と生徒 1 人当たり支出額から期待される成績よりも高いし（表 3.6）、この逆になっている国もある。この比較では学校外教育のための支出は考慮されていないが、日本ではそうした学校外教育が比較的盛んに行われている（表 7.7）ということが、こうした結果にある程度つながっているのかもしれない。

### 家庭環境と生徒のパフォーマンス

13. 家庭環境は成績に影響を及ぼすが、社会経済的状況がその効果を強めている可能性がある。PISA によれば、社会経済的環境に恵まれていないからといって必ずしも学校の成績まで悪くなるというわけではないが、社会経済的環境は、PISA の読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーのパフォーマンスに影響を及ぼす最も強力な要因の 1 つである。しかし、すべての国が家庭環境と生徒の成績の間に明確な相関関係があることを示しているが、一部の国は、成績の平均が高いことと成績が均一化していることは両立することを示している。カナダ、フィンランド、アイスランド、日本、韓国、スウェーデンはいずれも、男女を合わせた読解力のパフォーマンスは平均以上で、同時に、経済的、社会的、文化的状況が生徒の成績に及ぼす影響は平均以下である（表 6.1）。しかも、日本の不利な状況に置かれている生徒の得点は 512 点と、OECD の全生徒平均（500 点）を上回っている。
14. 日本では、家庭の富裕度と生徒の成績の関係も、北欧諸国、オーストリア、ベルギー、イタリア、ラトビア、ポーランドと同様に、比較的弱い。さらに、いくつかの OECD 諸国では、富裕度が比較的低いことは成績が国際平均を上回ることを妨げてはいない。実際、約 3 分の 1 の国で、富裕度下位 25% に位置する生徒は OECD 平均と同じか、それ以上の得点をあげている。フィンランド（読解力）と日本（3 分野全て）では、富裕度下位 25% の生徒が高得点をあげている（読解力については表 6.2、数学的リテラシーと科学的リテラシーについては [www.pisa.oecd.org](http://www.pisa.oecd.org) を参照）。日本とフィンランドの富裕度下位 25% の生徒の平均得点は、他の多くの OECD 諸国の富裕度上位 25% の生徒の平均得点よりも高い。
15. 従って、日本では他の国と比較して家庭環境は生徒の成績にあまり影響しない。これ



は、大部分の OECD 諸国の場合と異なり、日本ではあまり家庭環境に恵まれない生徒の成績はさほど悪くない——OECD の全生徒平均とほぼ同じ——ということである。

### 学習環境と生徒のパフォーマンス

16. 教師の支援を最も好意的に受け止めているのは、オーストラリア、ブラジル、カナダ、ニュージーランド、ポルトガル、英国、米国の生徒である。これに対し、オーストリア、ベルギー、チェコ共和国、フランス、ドイツ、イタリア、日本、韓国、ラトビア、ルクセンブルグ、ポーランドでは、国語教師から支援を受けている生徒は OECD 平均以下である（表 7.1）。例えば、オーストラリア、カナダ、デンマーク、アイスランド、ニュージーランド、ポルトガル、スウェーデン、英国では、生徒の 3 分の 2 から 4 分の 3 が、国語教師は殆どすべての授業で生徒が理解するまで教え続けると回答している。逆に、チェコ共和国、日本、韓国、ポーランドでは、こうした回答をした生徒は半数弱である。同じように、オーストラリア、カナダ、デンマーク、ハンガリー、アイスランド、ニュージーランド、ポルトガル、スウェーデン、英国では、生徒の 3 分の 2 以上が国語教師は殆どすべての授業で生徒を助けるために尽力すると回答したのに対し、フランス、韓国、日本、ルクセンブルグ、ポーランドでは、このように回答した生徒は半数弱にとどまっている（データについては [www.pisa.oecd.org](http://www.pisa.oecd.org) 参照）。各国の生徒は独自に判定しているので、入手できるデータからは、この調査結果がどの程度まで生徒の主観的な回答の違いではなく教師の態度や慣行の（国内および各国間の）真の違いを反映するのか評価できない。しかしながら、一部の諸国間の違いはあまりにも大きいだけに、注目に値する。また、日本、韓国、ラトビア、ポーランドの場合は、教師から支援を受けているとの回答が OECD 平均以下にとどまったが、積極的に支援している教師の生徒はそうでない生徒より PISA の得点が高いということも注目すべき点である。
17. 生徒および校長の回答によると、日本は学校の規律が最も厳しい国の 1 つである（表 7.2 および表 7.3 参照）。にもかかわらず、こうした国は国際的に見て学習環境が比較的良好だとしても、校長の回答にはいくつかの問題が指摘されている。例えば、日本では校長の 5% が、脅迫やいじめによって学習が大いにまたはある程度妨害されていると回答している（OECD 平均は 14%）。また、39% の校長は長期欠席による学習妨害（OECD 平均は 48%）、18% が授業のサボりによる妨害（OECD 平均は 33%）、29% が教師への敬意の欠如による妨害（OECD 平均は 24%）を指摘している（図 7.2 および [www.pisa.oecd.org](http://www.pisa.oecd.org) 参照）。
18. 日本の校長によると、教師の士気は OECD 平均以上であるが、極めて高くはない（表 7.5）。おおむね、校長が教師の高い士気やコミットメントを感じている学校はパフォーマンスもよい。
19. PISA の結果は、学校の方針や学校そのものが重要な役割を果たすことができるという

ことを示唆している（表 8.5、表 8.5a）。教師が強い期待感と士気を持ち、教室内の人間関係や規律が良好に保たれている学校は、パフォーマンスが良いという傾向がある。また、生徒が学校の資源をどの程度使用するか、専門知識を持つ教師がどのくらいいるかも生徒の成績に影響する傾向がある。PISA の結果は、1 つの要素で学校や国のパフォーマンスの優劣を説明することはできないということを示唆している。学校の資源、学校の方針と慣行、教室内の慣習など、様々な要因が優れたパフォーマンスに結びつくのである。日本の場合、生徒のパフォーマンスに強く関係する要素として、生徒が教師との良好な関係や規律ある環境を感じていること、生徒が学校資源を有効に活用していること、校長が教師の高い士気やコミットメントを認識していること、などが挙げられる。また、日本でパフォーマンスに殆ど影響が無い要素としては、学校の物理的インフラ、生徒の成績評価の実施頻度、学校の相対的自律性などがある。

20. 日本では、生徒のパフォーマンスと正の関係がある要素のいくつか（校長が教師の高い士気とコミットメントを感じていること、生徒が教師との良好な関係や学校の規律を認識していることなど）は、社会経済的条件の良い学校に強く見られるということは注目に値するだろう（表 8.6 参照）。

#### 校外での学習

21. 宿題に関する方針や慣行も生徒の学習時間に大きな影響を及ぼす要素である。多くの OECD 諸国では、宿題は生徒の学習時間の大きな部分を占めている。PISA2000 では、国語、数学、理科の宿題に毎週何時間費やしているか生徒に回答を求めた（図 7.6）。
22. 回答によれば、3 教科の宿題に費やした時間は平均週 4.6 時間で、最も少なかったのは日本とスウェーデンの 3.3 時間弱、最も多かったのはギリシャとハンガリーの 5.8 時間強であった（図 7.6）。ちなみに、この 3 教科の法定授業時間は平均週 12 時間である（OECD、2001 年）。さらに、生徒の多くが、学力向上のために学校以外での強化学習に時折あるいは定期的に参加している。例えば、OECD 平均で、生徒の 25% が、過去 3 年間に時折または定期的に参加している。日本と韓国では、この比率はそれぞれ 71%、64% である（図 7.7）。

（図表については報告書原文を参照のこと。）